

ウォートンの女性たち

——偶発的な親しさと断絶

佐々木 真理

1. はじめに

イーディス・ウォートン (Edith Wharton) が1937年8月に亡くなる直前、最後に完成させた短篇「万霊節」(“All Souls” 1937) は、ウォートンの残した作品の中ではいわゆる幽霊物語の一つとして区分されるものだが、ウォートンとしては珍しく女性間の関係を正面から扱った作品であることから、特にフェミニズム批評において注目を集めてきた。ウォートンが、作品においてはヒロインたちを通して当時の社会制度やジェンダー規範に抑圧される女性たちの生き方を共感を持って描きつつも、女性作家や女性運動を含め、同性に対して批判的、懐疑的な態度を表明せざるをえなかった¹、という側面をフェミニズム理論から解釈するには、この作品が格好の糸口を与えてくれるのがその理由だろう。ヒロインのセアラ・クレイバーン (Sara Clayburn) がつぶやく “I don’t want ever to risk seeing that woman again” (300) という言葉には、女性性と女性間の連帯への嫌悪を読み取ることができる一方で、セアラを救う語り手の女性の姿²に示されるように、作品に埋め込まれた女性同士の温かな交流と共感への渴望は、当時、女性作家として地位を確立する上でウォートンが味わった孤独と苦悩の表れであると解釈できるのだ³。

ウォートンは「万霊節」をふくむごく少数の短篇をのぞいては、男性を中心とした、特に男性の語り手が男性の物語を語るという形式を用いた短篇を発表している⁴。そのような短篇と、男性の視点から物語が進行する

ウォートンの長篇とを比べると、興味深い違いに気が付く。『歡樂の家』(*The House of Mirth*, 1905) や『無垢の時代』(*The Age of Innocence*, 1920) といった長篇において男性の視点から描かれる女性たちは、ゲイル・ルービン (Gayle Rubin) の指摘する、家父長制度における男性同士の絆を強化するための交換物でしかない。交換可能な財としての価値を失い、転落していくリリー・バート (Lily Bart) を見つめるだけのセルデン (Selden) の悲劇には、イヴ・K・セジウィック (Eve K. Sedgwick) が論じた男性間のホモソーシャルな絆と欲望を皮肉な目つきで批判するウォートンの視線を読み取ることができだろう⁵。だが、ウォートンは長篇においては、セジウィックが指摘するところの、ホモソーシャルな絆を特徴づける同性愛嫌悪、あるいはホモソーシャルな絆が抑圧するホモセクシュアルな欲望までは描くことはないのに対して、短篇においては、女性を排した構造を取ることで、異性愛規範から逸脱する男性間のホモセクシュアルな欲望により大胆に触れているのである。短篇「目」(“The Eyes” 1910) において描かれるホモセクシュアルな欲望には、ヘンリー・ジェイムズ (Henry James) らが形成する男性の知識人たちの交流に対する、当時の女性作家としてのウォートン自身の疎外感と嫉妬、憧れと同時に、彼らの関係の持つ欺瞞と欲望に対する皮肉な、冷徹な視線が反映していることは間違いない⁶。そしてそれはさらに言うならば、男性間のホモソーシャルな絆とホモセクシュアルな欲望の関係をウォートンが鋭く意識していたということの証左だろう。

注目すべきことに、ウォートンは女性を主人公とする短篇においては、女性同士の連帯におけるホモセクシュアルな欲望も長篇にはみられない大胆さで追究している。「万霊節」でセアラが体験する “irresistible fascination” (299) が仄めかす欲望には、母性や女性性といった要素には回収できないセクシュアリティが前景化されているのだ。本論では、従来、女性作家としての苦悩や、あるいは女性性や母性への相反する思いといった異性愛規範の枠組みの中で論じられてきたウォートンの短篇における女性同士の絆について、同じく短篇において前景化される男性間の絆と比較することで再検証を試みたい。男同士のホモソーシャルな絆とホモセクシュアルな欲望

の隙間に埋め込まれた女性同士の連帯と欲望は、どのような様態を取るのか、その隙間から何を物語っているのだろうか。

2. 真夜中のベルと偶発的な連帯

最初に取り上げたいのは、「小間使いを呼ぶベル」(“The Lady’s Maid’s Bell” 1902)と「勝利の夜」(“The Triumph of Night” 1914)の2つの短篇である。この2つには、いくつかの興味深い共通点とそして相違点があるが、それらの要素が重なり合って、男性間と女性間の連帯を差異化していると考えられるからだ。

「小間使いを呼ぶベル」と「勝利の夜」の主人公は、どちらも社会的には弱者の立場にあり、人に仕える側の人間である。2人とも、自分よりも社会的身分の高い同性の登場人物に強い共感と愛情を抱くが、事件に巻き込まれ、結局は、思いを寄せた相手の命を救うことができない、という物語の筋において、この2作品は共通している。また、その事件のさなかで主人公が目撃する幽霊が、思いを寄せた相手の運命を握っているという点も共通する。さらに興味深いのは、主人公がその思いを寄せる相手に対して、初対面で非常に強い共感を覚えるということだろう。「小間使いを呼ぶベル」では、2人の出会いはこう語られる。

She was a delicate-looking lady, but when she smiled I felt there was nothing I wouldn’t do for her. She spoke very pleasantly, in a low voice, asking me my name and age and so on, and if I had everything I wanted, and if I wasn’t afraid of feeling lonely in the country.

“Not with you I wouldn’t be, madam,” I said, and the words surprised me when I’d spoken them, for I’m not an impulsive person; but it was just as if I’d thought aloud. (15)

一方、「勝利の夜」において、初対面は以下のように語られる。

The voice was that of the youth who had jumped to the platform---a voice so agreeable that, in spite of the words, it fell consolingly on Faxon's ears. At the same moment the wandering station lantern, casting a transient light on the speaker, showed his features to be in the pleasantest harmony with his voice. (119)

2人の主人公はこのように相手に対して初対面で好意を抱くわけだが、「小間使いを呼ぶベル」の主人公はアリス・ハートリー (Alice Hartley) という若い女性であり、アリスが共感を抱くのはブリムプトン夫人 (Mrs. Brympton) という女性であるのに対し、「勝利の夜」では主人公はジョージ・ファクソン (George Faxon)、相手はフランク・ライナー (Frank Rainer) と、こちらは男性たちが主役となっている点で大きく異なる。注目すべきは、前述した共感は、ジェンダーの差異によって異なる性質を持つものとして差異化されていくことである。「勝利の夜」においては、ジョージとフランクの間に関係が築かれていく過程は次のように説明される。まず、恵まれない境遇に生まれ育ち、苦労を重ねてきたジョージは、彼自身が繊細な神経の持ち主であったため、大富豪のジョン・ラヴィントン (John Lavington) を叔父に持つフランクが虚弱体質であることにすぐ気が付く。さらに2人の青年の間の親密さが確固としたものとなるのは、2人がクルム夫人をめぐるって交わす会話なのである。クルム夫人に秘書として雇われることになっていたはずのジョージは、駅まで迎えに来てくれるはずだった夫人の櫛が見当たらないことから、当のクルム夫人から忘れられたことを駅で偶然出会ったフランクに話すと、クルム夫人を知るフランクは軽蔑の念を込めて夫人の名を口にする。クルム夫人の名前をめぐるって交わされた共犯者の笑いが2人の“reciprocal understanding”を促し、出会った瞬間に2人の間に生まれた“the sense of solidarity” (120) を決定的なものとするのである。クルム夫人をいわば交換することで、ジョージとフランクは男同士の緊密な連帯意識を築くのである。もちろん、この短篇では、そのような2人の関係が“brotherly”でありつつも、フランクの“a smile of such sweetness” (121)

に敏感に反応するジョージが、フランクが結核であることを聞いて彼の身を案じる以下の場面から読み取れるように、ホモセクシュアルな欲望の抑圧の上に成立していることが明らかとされている。

“All the same you ought to be careful, you know.” Then sense of elder-brotherly concern that forced the words from Faxon made him, as he spoke, slip his arm through Frank Rainer’s.

The latter met the movement with a responsive pressure. (122)

それに対し、「小間使いを呼ぶベル」では、アリスがブリムプトン夫人に対して抱いた共感については、アリス自身が驚いたと述べているように、なぜ初対面の女性にそのような思いを抱くことが可能であったのかという問いに対する答えは用意されていない。アリスは、20年もの間ブリムプトン夫人に仕え、妹のように可愛がられていた小間使いのエマ・サクソンが亡くなったためにブリムプトン夫人に小間使いとして雇われ、最初に屋敷を訪れたその日にエマの幽霊を目撃する。注目すべきは、エマが亡くなってアリスが雇われるまでの半年の間に4人もの小間使いが次々と雇われ、アリスの他は誰ひとりとして長続きせず、すぐに辞めていったというエピソードである。話が進むにつれて、他の小間使いたちはエマの幽霊に怯え辞めたいらしいことがわかるわけだが、アリスだけは彼女たちとは違う反応を示す。

I don’t know how long she stood there. I only know I couldn’t stir or take my eyes from her. Afterward I was terribly frightened, but at the time it wasn’t fear I felt, but something deeper and quieter. She looked at me long and hard, and her face was just one dumb prayer to me . . . (30)

この場面で、アリスは幽霊となって出現したエマが沈黙のまま訴えかける祈りに似た思いに敏感に反応するが、なぜ、アリスだけが幽霊のエマの思

いを読み取ることができたのか、他の小間使たちとどこが違ったのかについての説明はないのである。さらに言うならば、なぜ、幽霊のエマは新参者のアリスに、自分が仕えてきた夫人の運命を助けるように頼んだかについても謎のままだ。ジョージとフランクの間の絆が女性の交換とホモセクシュアルな欲望の抑圧の上に成立したことが丁寧に説明されるのに対し、アリスとブルムプトン夫人、アリスとエマという2組の女性の間にも生まれた連帯は、まったくの偶発的なものとして描かれているのである。

竹村和子は、女性の連帯について、「おそらく男のホモソーシャルな欲望と女同士の絆のもっとも大きな相違は、前者の場合、女を交換価値とする制度を産出し、かつ制度によって裏づけられる社会装置であるのに比べ、後者の場合は、制度によって否定され、制度の隙間で構築される個別的で私的な出来事である点だ」(95)と指摘する。『『目のまへの目的』を共有するときに訪れる、きわめて個別的で、私的な出来事——具体的な差異を横断しつつ、つねに差異によって解体の危機にさらされる一瞬、一瞬の出会い——個人的な強烈な親和力なしには持ちこたえられない体験」(101)としてあるのではないかと竹村が論じる女性同士の連帯こそ、アリスとブルムプトン夫人、そしてアリスとエマとの間に生まれた、個人的な親和力によって支えられた連帯に当てはまるのではないだろうか。「政治的連帯というにはあまりに私的で、心情的共感というにはあまりに激しく、同性愛のアイデンティティで説明するにはあまりに偶発的で、束の間というにはあまりに重大な」(竹村 101) 女性たちの絆は、もちろん、したがって、すぐに消滅するしかないものだ。あたかも、アリスを求めてエマが鳴らしたベルの音が、いずれは夜の静寂に消えていく、瞬間的なものでしかありえないように。

だが、「勝利の夜」において、ジョージはフランクを結局は見捨てることとなり、彼との間の絆を守ろうとすることはない。フランクの叔父、ジョン・ラヴィントンの屋敷に招かれたジョージは、そこでジョン・ラヴィントンの瓜二つの男性を目撃する。それは、甥のフランクの死を願う、ジョン・ラヴィントンの悪意と殺意が具現化した生霊であった。その生霊に気

が付いたのはジョージだけであったにもかかわらず、ジョージは自分が目撃した霊がフランクの運命を暗示していることを認めるのを拒絶する。不運な境遇のために“abnormal sensitiveness to the vicissitudes of others” (139) を身につけてしまったが、“the one weaponless and defenceless spectator” (138) にしか過ぎない自分には関係のない話だと、ジョージはフランクを見捨て、そのまま屋敷から逃げ出してしまうのである。結果として、ジョージのその行動がフランクの命を縮めることになる。自分よりも社会的身分の高い人々に対する己の無力さを認識しつつも、その社会からの逸脱を拒否するジョージは、『歓楽の家』のセルデンと同じく、当時の社会制度に追従することしかできない。ジョージはホモソーシャルな絆の社会を攪乱することはないのだ。それに対し、結果としてはブリムプトン夫人を助けることはできなかったわけだが、アリスは幽霊のエマが鳴らしたベルの音に応答する。そして、エマが伝えよう、訴えかけようとするものを懸命に理解しようとし、無力感を抱きつつも、エマとブリムプトン夫人に対して抱く「個人的な強烈な親和力」に従うのである。

2つの短篇は悲劇で幕を閉じる。「勝利の夜」のジョージは、フランクの血に染まる自らの両手を目にしたあの“dreadful moment” (145) に囚われて生きていくことを予感させる。だが、「小間使いを呼ぶベル」ではブリムプトン夫人は命を落とし、アリスが応えようとしたエマとの偶発的で私的な連帯は消滅するものの、ブリムプトン夫人を虐待していたブリムプトン氏は、エマとアリスとブリムプトン夫人の連帯から逃げるように屋敷を立ち去る。つかの間の女性たちの連帯は、ホモソーシャルな男性たちの連帯を無力なものとして前景化しているのである。

3. メランコリーを拒否する連帯

1925年に発表された短篇「メアリー・パスク嬢」(“Miss Mary Pask”)は、語り手が知識人階級の独身の男性であり、その視点から女性たちの姿が描かれるという点で、ウォートンの作品に多くみられる特徴を備えていると

言えるだろう。だが、この短篇においては、彼が目撃する幽霊と恐怖の体験を通して、異性愛の陰に封印された女性同士のホモセクシュアルな欲望と連帯の痕跡が浮き彫りにされていく。

物語は、絵を描くためにブルターニュ (Brittanny) に滞在していた語り手が、人に勧められてモルガ (Morgat) へと足を伸ばしたときに、ふと古くからの知人であったグレース・ブリッジワース夫人 (Mrs. Grace Bridgeworth) の姉であるメアリー・パスク (Mary Pask) が近くに住んでいたのを思い出したことから始まる。語り手はメアリーを訪問しようと思い立ち、メアリーの家まで苦勞してたどりつくが、まさにその瞬間に、メアリーが死亡したという知らせをグレースから聞かされていたことを思い出すのである。語り手は家の中で死んだはずのメアリーの幽霊と再会し、性的な関係を持つことを迫られたと思い込み、命からがら逃げ出す。

この短篇は、性的に抑圧されたオールド・ミスという典型的な女性のセクシュアリティに、それまで女性との関係を避けてきた語り手が脅かされるという (Fedorko 104-08)、ウォートンらしい皮肉な視点で男性をコミカルに描いた物語であると、一見したところまとめることができる。だが、ここで注目したいのは、そのように未婚の女性の中に異性愛の欲望が抑圧されていると解釈してしまうのは、語り手の男性でしかないということだ。非常に仲の良い姉妹であったメアリーとグレースは片時も離れることなくヨーロッパで暮らしていたが、グレースは、語り手の長年の友人であるホレス・ブリッジワース (Horace Bridgeworth) との結婚を機にニューヨークで暮らすようになる。語り手は、メアリーがアメリカのグレースのそばで暮らすことを拒み、ヨーロッパにとどまった理由をこう推測する。

I never quite understood why Mary Pask refused to join Grace in America. Grace said it was because she was “too artistic”---but, knowing the elder Miss Pask, and the extremely elementary nature of her interest in art, I wondered whether it were not rather because she disliked Horace Bridgeworth. There was a third alternative---more conceivable if one knew Horace---and that was

that she may have liked him too much. (147)

女性の創造的な才能と興味をまったく無視する語り手が、メアリーとグレースの断絶の理由として思いつくのは、メアリーがホレスを嫌っていることか、あるいは、男性として魅力のあるホレスにメアリーが好意を寄せているのではないか、ということだ。もちろん、語り手のホレスに対する評価からは、語り手とホレスとの間に、ホモソーシャルな連帯とホモセクシュアルな欲望の抑圧があることが連想される。いずれにしても、語り手はメアリーもグレースも、想像力のかけらもない、異性愛の求愛の対象としては魅力に乏しいと決めつけ、姉妹の間に結ばれていた“a close intimacy” (148) は、家父長制度における異性愛結婚によって無事に解消されたとしか考えないのである。

だが、語り手と、語り手が幽霊だと信じ込んでいるメアリーとの間に交わされる会話からは、語り手の解釈ではとらえきれないメアリーの思いが浮かび上がってくる。語り手と対峙したメアリーが尋ねるのは、まず、妹のグレースのことなのである。自分の死を知ったときグレースがどのような反応を示したか語り手に問いかけ、グレースが悲しんだことを知ると、メアリーは“I’m glad she was so sorry. . . . It’s what I’ve been longing to be told, and hardly hoped for. Grace forgets” (155) とつぶやく。さらに、メアリーはグレースが結婚した後の孤独について嘆いた後、“Grace thought she was always thinking of me, but she wasn’t. She called me ‘darling,’ but she was thinking of her husband and children” (156) とグレースへの恨みと嫉妬を語るのだ。

メアリーの訴えから読み取れる、姉妹間の緊密な連帯が意味するものについて、メアリーの家から逃げ出した語り手はそれ以上の想像をすることはできない。そして、妹に対するメアリーの強い愛情と欲望から目をそらすものの、語り手はメアリーのことを忘れることができず、グレースがメアリーのためにきちんとした墓石を建てていないのではないかという不安に苦しめられるようになる。“The queer neglected look of the house” (160) が脳裏から離れず、メアリーの打ち捨てられた家と庭の様子を思い出し煩悶する語り

手は、メアリーが告白した妹への思いを、墓の不在に対する恨みと誤読するしかできない。

物語の結末においてメアリーが実は生きていたことが明らかになるとき、「メアリー・バスク嬢」は、異性愛規範を通してしか姉妹の連帯を読むことができない、読もうとしない語り手——つまり、男同士の緊密なホモソーシャルな絆に生きそこから逸脱した欲望を読もうとしない男性が、姉妹たちの連帯に翻弄される物語として読み替えられる。そのとき、この短篇のもう一つのキーワードである記憶の忘却も新たな意味を帯びてくる。物語において、語り手は二重の記憶の喪失に翻弄される。まず、語り手は、モルガという地名を聞いて、長らく忘れていたグレースを、それからメアリーの名前を思い出す。さらに、メアリーの家をようやく探し当て家の中に入ったその時に、メアリーが1年近く前に亡くなったことを、“a smothered memory struggled abruptly to the surface of my languid mind” (151) と思い出すのである。奇妙なことに、語り手はどうやらグレースから直にメアリーが亡くなったという知らせを聞かされたはずなのだが、そのことをメアリーの家の中に入る瞬間まで忘れていたのである。そして、語り手が取り憑かれるのは、メアリーの「彼女は忘れているのね」という一言なのだ。ここで語り手は、メアリーが仄めかしているのが、グレースがメアリーの墓石を忘れていることであると思込む。だが、もちろん、結末で明かされるように、実は死んではいなかったメアリーが言わんとしていたのは墓石のことではなかった。グレースが結婚する前、姉妹の間に確かにあった緊密な連帯のことをメアリーは仄めかしていたのである。

グレースはもちろん、異性との結婚によって異性愛規範を受け入れ、姉との間にあった親密さを忘れ、おそらくは、何を忘れたのか、喪失の対象を、さらには喪失したことすら忘れてい、フロイトの言うところのメランコリーの状態にある。ジュディス・バトラーは『ジェンダー・トラブル』の第2部第3章において、フロイトの喪とメランコリーに関する論から、主体は、同性の親に同一化することで同性を性愛の対象として喪失し、その喪失に気が付かないという、異性愛者のメランコリーを論じている (78-

89)。グレースが喪失し、喪失したことにも気が付かないのはまさに姉のメアリーとの間の愛であるといつてよいだろう。メアリーとグレースの間の、同性間のホモセクシュアルな愛と欲望は、グレースによって喪失され、喪失したことも忘れ去られ、語り手によって異性愛規範のもとに読み換えられる。

だが、語り手が死んだものと思ひ込んだメアリーの、そして、グレースによつても一時は亡くなったものと思われていたメアリーの生存は、彼女のホモセクシュアルな欲望が異性愛の枠組みに回収されることを、つまり、異性愛規範にそつてジェンダーが生産される際にメランコリーによつて同性愛が否定/保存されることを拒否する (Butler 78)。死者のふりをして語り手を翻弄し、「あなたは忘れてるのね」というメッセージをグレースのもとに届けさせたメアリーの振る舞いは、女性間の緊密な連帯と欲望を前景化するのである。そして、その瞬間、異性愛の起源にあつて喪失されたホモセクシュアルな欲望は再び回帰し、男同士のホモソーシャルな絆と異性愛の規範を攪乱するのだ。

4. 危険で奇妙な親しい連帯

セジウィックは、“an intelligible continuum of aims, emotions, and valuations links lesbianism with the other forms of women’s attention to women” (2) と指摘し、“women loving women” と “women promoting the interests of women” は連続体を形成すると述べる (3)。もちろん、その連続体には、セジウィックもさりげなくさしはさんでいるように、“much homophobia” や “conflicts of race and class” (2) といった深い断絶が認められるが、男性と違って、女性は途切れない連続体を形成しようと主張しているのである。しかし、ウォートンは、女性同士の間結ばれる、個人的な親和力が持ちこたえる個別で私的な絆を浮かび上がらせる「小間使いを呼ぶベル」、女性間のホモセクシュアルな欲望によつて異性愛規範を攪乱させる「メアリー・パスク嬢」といった短篇を描きつつも、セジウィックが唱える女性の連続体

の、むしろ亀裂をこそ浮かび上がらせる短篇も発表している。最初に取り上げた短篇「万霊節」において中心となるのは、女性の連続体が階級間の分断によって解体される様なのである。

この作品には複数の女性間のつながりが描かれている。ヒロインのセアラ・クレイバーンは、ウォートンを彷彿とさせる、独立心の強い上流階級の女性である。夫の亡き後、広大な邸宅に独りで住むセアラは、義理の母の代からの使用人たちに囲まれて何不自由のない暮らしを送っている。その中でもスコットランド出身の年輩のメイドのアグネスは律義な性格でセアラによく仕えており、セアラはアグネスのことを信頼している。だが、そのような関係があくまでも階級の差の上に成り立ったものであることは、アグネスの帽子やコートがすべてセアラのお下がりであることなどがさりげなく暗示している。そのようなセアラの階級意識は、ある年の10月最後の日の出来事によっても明らかとなる。一人で散歩に出かけたセアラは、見かけぬ女性と出会う。明らかにセアラより社会的身分の低いその女性に対し、セアラは威圧的にどこに行くのかと問いかける。“Only to see one of the girls” (278) と答えたその女性と別れた直後、セアラは転倒して足を痛め、身動きできないままその夜を過ごすことになる。ところが、次の日、セアラは自分に忠実に仕えてくれていた使用人のアグネスだけではなく、他の使用人たちも屋敷の中には見当たらず、広い邸宅に自分ひとりだけが取り残されていることに気が付くのである。不安と孤独と恐怖に満ちた1日が過ぎ、次にセアラが意識を取り戻すと、何事もなかったかのように働くアグネスたちを目にする。それから、1年後の同じ日、セアラはまたあの見知らぬ女性と出会う。セアラの威圧的な “You shan’t set foot in my house again. Do you hear me? I order you to leave” (297) という命令をあざ笑うかのようにその女性は姿を消し、恐怖に襲われたセアラはニューヨークの従妹の元へと逃げ出す。語り手であるセアラのいところが最後にまとめているように、スコットランド出身のアグネスにこの見知らぬ女性が会いに来ていたのだとしたら、セアラが自分とアグネスとの間にあると信じていたつながりは、アグネスとその女性との連帯の前には何の意味も持たず、そ

こには深い亀裂があることになる。女主人の体のことを心配し、女主人のお下がり喜んで身にまとい、献身的に仕えるメイドは、自分と同じ階級の女性との連帯の方を選んだのである。

一方で、セアラを救うのも女性である語り手のいとこである。ニューヨークのフラットに一人で暮らす語り手は、コネティカットの屋敷から逃げ出してきたセアラを温かく招き入れ、優しく介抱する。最初の事件のあった日に、セアラが電話で屋敷に呼びつけたのも語り手で、セアラが恐怖の体験を語ったのも語り手に対してだけであった。語り手に対し、“let herself be undressed and put to bed like a baby” (296) と身をゆだねるセアラの姿からは、セアラと語り手の間の強く親密な連帯をうかがうことができる。もちろん、アグネスとあの見知らぬ女性との間に存在するのも、語り手が魔女の集会とその集会が持つ “irresistible fascination” と “the desire . . . breaks down all inhibitions” (299) を暗に仄めかすことからわかるように、禁じられたホモセクシュアルな欲望であった⁷。

セアラを暖かいベッドに寝かせて介護する語り手の姿は、『歓楽の家』において、リリー・パートを優しく介抱するネッティ・ストラザー (Nettie Struther) の姿と重なるものがある。『歓楽の家』において、リリーとセルデンの異性愛の物語の前には無力でしかなかったが、リリーとネッティの連帯は階級の差を乗り越え、束の間ではあったが確かに形成された。だが、「万霊節」においては、ウォートンは作品から男性を排除することで、より大胆に女性のホモセクシュアルな欲望を異性愛から解放しつつも、女性の連続体に亀裂を生じさせる階級という要素を描かずにはいられなかった。

ウォートンは、「小間使いを呼ぶベル」では、女性間の強い個人的な親和力と共感が結ぶ連帯を、「メアリー・パスク嬢」では、女たちのつながりが男たちのつながりをおびやかす瞬間をあらわにすることで、女たちの親密さの持つ力を描いた。だが、「万霊節」における女性の連続体の断絶は、セジウィックが述べるほど、「女を愛する女」と「女の利益を促進する女」との連続体が、男性のそれとは対照的ではないことを表しているといえる。キャロル・J・シングリー (Carol J. Singley) は、社会においてタブー

であった同性愛が伝統的な性の政治学を攪乱する可能性をウォートンの作品は否定し、男性間の同性愛を “simply another version of the familiar power struggles between the sexes” (278) とみなしていると指摘するが、この指摘は女性間の連帯に対するウォートンの考えにも当てはまるのではないだろうか。「あの女性にもう一度会う危険は冒したくない」という最後のセアラの言葉は、連帯の親和力に魅かれつつも断絶を前にして恐怖に立ちすくむ彼女の姿を浮かび上がらせる。そこには、19世紀後半から20世紀にかけて、ジェンダーのありようが大きく変動する中、女性作家として孤独に果敢に書き続けたウォートンの、性の政治学に対する鋭い認識と苦い思いが込められているのではないだろうか。

注

- 1 自伝 *A Backward Glance* にみられる、先行する女性作家たちへの批判 (1002)、女性たちとの交友の不自然なまでの記述のなさ (Goodman “Edith Wharton’s Inner Circle,” 56) や、女性同士の連帯や同時代の同性愛の女性たちへの嫌悪 (Lewis 443-44) が指摘されている。
- 2 語り手のジェンダーについては、女性であるとするもの (Lee 743, Nettles 256, White 105)、故意に特定されないように書かれたとする論 (Fedorko 157) があるが、本稿では女性であるとの前提で論を進める。その根拠はLeeとNettelsも指摘しているように、語り手のライフスタイルやセアラとの会話及び関係である。
- 3 19世紀末から20世紀にかけて、女性作家のありようや世間の評価、メディアの発達と文学市場が大きく変容したことがウォートンに及ぼした影響について論じ、女性作家としてのウォートンの苦悩の軌跡を論じたものには、Campbell, Goodmanの *Edith Wharton’s Women* が挙げられる。
- 4 ウォートンにおける語り手のジェンダーと作品のテーマとの関わりについては、Nettels 257-58とWhite 58-9を参照。
- 5 ウォートンの長篇における、家父長制度における女性の交換と男性同士の連帯の関わりについては、ルービンとセジウィックの論をもとに詳細に論じた Haytock 75-6とSensibarを参照。
- 6 ウォートンとジェイムズらの関わりについては、Goodman “Inner Circle” と Haytockが詳細に論じている。
- 7 McDowellとZilversmitを参照。

Works Cited

- Butler, Judith. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. 1990. New York: Routledge, 2008. Print.
- Campbell, Donna M. *Resisting Regionalism: Gender and Naturalism in American Fiction, 1885-1915*. Athens: Ohio UP, 1997. Print.
- Fedorko, Kathy A. *Gender and the Gothic in the Fiction of Edith Wharton*. Tuscaloosa: The U of Alabama Press, 1995. Print.
- Goodman, Susan. “Edith Wharton’s Inner Circle.” *Wretched Exotic: Essays on Edith Wharton in Europe*. Ed. Katherine Joslin and Alan Price. New York: Peter Lang, 1993. 43-60. Print.

- . *Edith Wharton's Women: Friends and Rivals*. Hanover: UP of New England, 1990. Print.
- Haytock, Jennifer. *Edith Wharton and the Conversations of Literary Modernism*. New York: Palgrave, 2008. Print.
- Lee, Hermione. *Edith Wharton*. New York: Alfred A. Knopf, 2007. Print.
- Lewis, R.W.B. *Edith Wharton: A Biography*. New York: Harper & Row, 1975. Print.
- McDowell, Margaret B. "Edith Wharton's Ghost Tales Reconsidered." *Edith Wharton: New Critical Essays*. Ed. Alfred Bendixen and Annette Zilversmit. New York: Garland, 1992. 291-314. Print.
- Nettels, Elsa. "Gender and First-Person Narration in Edith Wharton's Short Fiction." *Edith Wharton: New Critical Essays*. Ed. Alfred Bendixen and Annette Zilversmit. New York: Garland, 1992. 245-60. Print.
- Rubin, Gayle. "The Traffic in Women: Notes on the 'Political Economy' of Sex." *Toward an Anthropology of Women*. Ed. Rayna R. Reiter. New York: Monthly Review Press, 1975. 157-210. Print.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. New York: Columbia UP, 1985. Print.
- Sensibar, Judith L. "Edith Wharton Reads the Bachelor Type: Her Critique of Modernism's Representative Man." *Edith Wharton: New Critical Essays*. Ed. Alfred Bendixen and Annette Zilversmit. New York: Garland, 1992. 159-80. Print.
- Singley, Carol J. "Gothic Borrowings and Innovations in Edith Wharton's 'A Bottle of Perrier.'" *Edith Wharton: New Critical Essays*. Ed. Alfred Bendixen and Annette Zilversmit. New York: Garland, 1992. 271-90. Print.
- Wharton, Edith. "All Souls'." 1937. *The Ghost Stories of Edith Wharton*. New York: Scribner, 1997. 275-300. Print.
- . *The Age of Innocence*. 1920. *Edith Wharton: Novels*. New York: The Library of America, 1985. 1015-1302. Print.
- . *A Backward Glance*. 1934. *Edith Wharton: Novellas and Other Writings*. New York: The Library of America, 1990. 767-1068. Print.
- . "The Eyes." 1910. *The Ghost Stories of Edith Wharton*. New York: Scribner, 1997. 36-57. Print.
- . *The House of Mirth*. 1905. *Edith Wharton: Novels*. New York: The Library of America, 1985. 1-347. Print.
- . "The Lady's Maid's Bell." *The Ghost Stories of Edith Wharton*. New York: Scribner, 1997. 12-35. Print.
- . "Miss Mary Pask." 1925. *The Ghost Stories of Edith Wharton*. New York: Scribner, 1997. 146-62. Print.

- . “The Triumph of Night.” *The Ghost Stories of Edith Wharton*. New York: Scribner, 1997. 118-45. Print.
- White, Barbara A. *Edith Wharton: A Study of the Short Fiction*. New York: Twayne, 1991. Print.
- Zilversmit, Annette. ““All Souls” : Wharton’s Last Haunted House and Future Directions for Criticism.” *Edith Wharton: New Critical Essays*. Ed. Alfred Bendixen and Annette Zilversmit. New York: Garland, 1992. 315-29. Print.
- 竹村和子. 「＜悪魔のような女＞の政治学 ——女の『ホモソーシャルな欲望』のまなざし」. 『彼女は何を視ているのか ——映像表象と欲望の深層』. 東京: 作品社, 2012. 89-102. Print.

* 本研究はJSPS 科研費 25370305 の助成を受けたものである。

